The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	『浮生六記』にみえる花論 ： 『紅楼夢』と比較して
Author(s)	池間, 里代子
Citation	中国研究集刊. 2013, 57, p. 41-60
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/58633
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

中国研究集刊 巨号（総五十七号）平成二十五年十二月 四一―六〇頁

『浮生六記』にみえる花論

―『紅楼夢』と比較して―

池間里代子

はじめに

中国清代中葉、沈復（字、三白／号、梅逸）によって『浮生六記』が書かれた。この作品は中国では珍しいノンフィクション、私小説の体裁をとっている。元々六巻あったが前四巻しか伝わらず、後二巻の偽作まで出現したが、二〇〇五年に南京の古本屋で偶然発見された銭泳『記事珠』に第五巻「中山記歴」が引用されていた。これが先年日中間で物議を醸した(注1)。

沈復の執筆動機の一つにほぼ同時代に流行した『紅楼夢』への対抗心があると従来囁かれていた。その中で、花に関する記述が『浮生六記』において非常に詳しく展開されており、『紅楼夢』を批判していると思われる個所もある(注2)。そこで本稿では『浮生六記』と『紅楼夢』に見える花に注目し、両者を比較した上で『浮生六記』で繰り広げられる花論を掘り下げて考察してみたい。

使用テキスト：

新増補『浮生六記』（人民文学出版社、二〇一〇年）

松枝茂夫訳『浮生六記』（岩波書店、一九八一年）

『紅楼夢』上・下（人民文学出版社、一九八二年）

伊藤漱平訳『紅楼夢』上・中・下（平凡社、一九七三年）

※ 引用箇所の傍線は池間

※ 写真撮影は池間

一、『浮生六記』について

作者沈復（一七六八：乾隆二八年～?）は没年が不明だが、第四巻の記述が一八〇八：嘉慶一三年、作者四六歳であることが確認されている。書名の「浮生」は李白の「浮生若夢為歡幾何」（『春夜宴從弟桃花園序』）から取ったらしい。元和（現在の蘇州）に生まれ、科挙合格を目指すも父の生業である幕友となった。幕友は知事の転勤について移動し、自然と旅をするため『浮生六記』は旅行文学とも言える。

しかし、主題は亡妻への深い愛情と追憶であろう。この点から言えば、林黛玉はじめ心が通じていた少女たちへの追慕が主題の一つである『紅楼夢』との相似が見られる。

このことは、邦訳者である松枝茂夫が『紅楼夢』と『浮生六記』の両方を訳し「解説」にも書いている(注3)ように、両者の相似を強く感じたことが邦訳の動機となったようだ。当初は佐藤春夫との共訳として河出書房から一九三六：昭和一一年に世に送り、その後一九八一：昭和五六年に岩波書店から松枝のみの名で刊行された。

また、松枝以外にも邦訳者がおり、「世界ノンフィクション全集」三三巻（筑摩書房一九六二：昭和三七年）に石田貞一訳として所収されている(注4)。

巻ごとのタイトルは以下の通り。

巻一　閨房記楽（結婚の幸福）
巻二　閑情記趣（趣味の生活）
巻三　坎坷記愁（不遇に泣く）
巻四　浪游記快（旅は楽し）
巻五　中山記歴（琉球遊記）［原闕］
巻六　養生記道（永生の道を求めて）［原闕］

『紅楼夢』が白話文を主にしているのに対して、『浮生六記』は文語で書かれていることも特筆しておく。

二、中国の花譜・花論と現状

中国における花に対する関心は当然古代からあったが、それが文学作品や絵画などに積極的に取り上げられたのは六朝・隋・唐代からだと考えられる。その理由は宮廷文化を通じて上流階級や僧侶たちに花を観賞の対象

とする心のゆとりや美意識の発達があったからとされる(注5)。

古くは『詩経』にも花の名がみえるが、積極的に花を集め書物の形にしたものは六朝の嵇含『南方草木状』が嚆矢だというのが定説である(注6)。唐代には欧陽修の『洛陽牡丹記』をはじめ、多くの花譜が書かれた。時代が下るに従い芍薬譜（王観）・梅譜（范成大）・菊譜（范成大）・蘭譜（趙時庚）や瓶花譜（張謙徳）などが盛んに書かれ、明代では花論へと発展した。とりわけ袁宏道の『瓶史』(注7)は技術面の記述が多く(注8)、日本の花道界、特に江戸時代に創流された宏道流では彼の影響を大きく受け、現代においても脈々と続いている。

ただし、中国のいけばなは現代語で「插花」というほど「瓶に挿す」のを旨としており、現代日本で見られる「剣山に花をいける」という形(注9)に発展しなかった。

ところが、『浮生六記』には花留めの方法論として剣山が紹介され『中国传统插花艺术』においてもこれを引用している(注10)。中国剣山は沈復の独創と言える。

中国の花譜・花論は『瓶史』以降文献的に登場せず、私見ではあるが『浮生六記』（特に巻二）にみられる花論が最新のものだと考えられる(注11)。そこで、本稿では花論という視点から『浮生六記』を取り上げ、作者がどのようないけ方を提唱するのかを考察する。

現代中国の現状は、フラワーアレンジメント全盛と言っても過言ではなく、伝統的な挿花や『浮生六記』にみられるいけ方はほとんど目にしない(注12)。逆に留学や結婚などで日本に滞在する人々によって日本の花道が学ばれている(注13)。

三、『紅楼夢』に見える挿花

それではまず、『紅楼夢』にみえる挿花について七例を挙げる。

①【本文】因那日见园里桂花，折了两枝，原是自己要插瓶的，忽然想起来说，这是自己园里的才开的新鲜花，不敢自己先玩，巴巴的把那一对瓶拿下来，亲自灌水插好了，叫人拿着，亲自送一瓶进老太太，又进一瓶与太太。（第三七回　上册　四九六页）

【和訳】園で木犀をお目にとめられ、二枝手折られてましたが、はじめはご自身で瓶に挿そうというおつもりでいらっしゃいましたのね。ところが急に思い出したように、これはわたしたちの園内で初に咲いた花なのに、自分がさきに楽しんだりしては申しわ

けない、こう仰せられ、わざわざあの一対の瓶を下して、手ずから水を注ぎ、ちゃんとお活けになったうえで、人に持たせ、じきじきに一瓶をご後室さまに、いま一瓶を奥方さまに届けてさしあげられました。

（上冊五〇七―五〇八頁）

②【本文】那一边设着斗大的一个汝窑花囊，插着满满的一囊水晶球儿的白菊。

（第四〇回　五三八頁）

【和訳】向こう側には、斗（ます）ほどもある汝窯の花嚢が置かれ、瓶一面に水晶の毬を思わせる白菊が挿してあります。

（上冊五五四頁）

③【本文】案上只有一个土定瓶中供着数枝菊花，…

（第四〇回　上冊五四一頁）

【和訳】机上には二、三本菊を投げ入れただけの定窯の下手物の花瓶がぽつんと置かれ、…

（上冊五五六頁）

④【本文】（李纨）…我才看见拢翠庵的红梅有趣，我要折一枝来插瓶。

（第五二回　上冊六七五頁）

【和訳】（李紈）…じつはわたし、さっき、櫳翠庵の紅梅を眼にして、これは見事だ、一枝手折って瓶に挿したいなと、そう思い立ったのですけれど…

（中冊一三八頁）

⑤【本文】原来这枝梅花只有二尺来高，旁有一横枝纵横而出，约有五六尺长，其间小枝分歧，或如蟠螭，或如僵蚓，或孤削如笔，或密聚如林，花吐胭脂，香欺兰蕙…

（第五二回　上冊六七六頁）

【和訳】ところでこの梅、高さこそ二尺あまりしかないものの、わきから枝が一本縦横にひろがっていて、ざっと五、六尺はありましょうか、そのあいだから小枝が岐れ出て、わだかまった螭さながらのもあれば、蚯蚓ののたくった態のもある。筆のように一本だけ削げたのがあるかと思えば、林のように密集したのもありというふうで、花は胭脂を吐くかと思わせ、香は蘭蕙をも欺かんばかり…。

（中冊一四〇頁）

⑥【本文】（贾母笑道）好俊梅花！

（第五二回　上冊六七九頁）

【和訳】（後室：主人公賈宝玉の祖母）ほう、なんと見事な梅だろう！

（中冊一四二頁）

⑦【本文】各色旧窑小瓶中都点缀着『岁寒三友』『玉堂富贵』等鲜花草。（第五三回　上册七二九頁）

【和訳】とりどりの古い焼物の小瓶には、「歳寒三友（松・竹・梅をいう）」「玉堂富貴（玉蘭・海棠・牡丹をいう）」などの鮮やかな草花が活けてあります。（中冊一九六頁）

①の木犀はどのように活けたのかが不明だが、二瓶をお祖母様と母上に差し上げたというだけのことである。②③はいずれも第四〇回に出てくる菊で、②は探春の部屋に飾られた白菊、③は薛宝釵の部屋に飾られた菊である。②のきらびやかさと③の地味さとを対比することによって薛宝釵が普段から構いつけずに質素な生活をしていることが描写されている。④⑤は妙玉からもらい受けた紅梅の描写だが、それを見た⑥の「ほう、なんと見事な梅だろう！」という反応が意外に素気ない。⑦は元宵節の為にいけられた花である。歳寒三友（松竹梅）は季節的にも合致しているが、玉堂富貴（玉蘭・海棠・牡丹）は時期のものが揃うとは限らないので、海棠が造花である可能性が高い。このような謎語画題（めいごがだい）（注14）は南宋画の系譜であり、ここでは格式あるいけ方をしていると想像するが、文人いけ（注15）へ発展していく素地を持っている。

『紅楼夢』にみえる挿花は、行事の叙述や人物形象の暗示、枝ぶりの描写などに留まり、比較的平凡であった。

四、『浮生六記』に見える挿花及び花論

『浮生六記』では特に第二巻「閑情記趣」において花の扱いについての記述が多く見られる。六例あるが、分量が多いので、その都度コメント（○以下）を付す。

①【本文】惟每年篱东菊绽，积兴成癖。喜摘插瓶，不爱盆玩。（二四頁）

【和訳】毎年秋になると、生籬に菊を作るのが習癖になってしまった。これらの花を摘んできて瓶に挿すのが好きで、盆栽は好まなかった。（七八頁）

○現代でも商業ルートで販売されている花は茎がまっすぐで、雅趣に欠ける。花展で使用する場合、山で採取する・庭で栽培する・植木屋で根付きを購入するなどの工夫がなされることが多い。菊を例に取ると、枝がなよなよとしている「荒菊」を栽培するには、植木鉢を九〇度傾けておけば自然と理想的な菊が育つ。盆栽の手法を取り入れる場合もあるの

だ。『浮生六記』では生籬に菊を作るのであるから、自分の好みのものが入手でき、さらに陶淵明の気分をも味わえる。

②-一.

【本文】其插花朵，数宜单，不宜双。每瓶取一种，不取二色。（二四頁）

【和訳】花を挿すときの数は、単数がよく、対になったのはおもしろくない。瓶ごとに一種と限るべきで、二色を活けるのはよくない。（七八頁）

○いけばなの色彩論である。単色とはいえ、自ずと濃淡や花の大小によって変化を持たせる。多色の作品は概ね落着きがなく、散漫な印象になりやすい。特に「文人いけ」では清雅を旨とするので、単色を推しているのである。

②-二.

【本文】瓶口取阔大，不取窄小，阔大者舒展不拘。自五、七花至三、四十花，必于瓶口中一丛努起，以不散漫、不挤轧、不靠瓶口为妙，所谓〝起把宜紧〟也。（二五頁）

【和訳】瓶の口はひろく大きなのがよく、狭くて小さいのはよくない。ひろくて大きいのはのびのびとするからである。五、六本から三、四十本の花を挿すにしても、必ず瓶の口からひと叢にしてぱっと咲かせ、ばらばらにならぬように、ぎしぎしに詰めこまぬように、花瓶の口にしなだれかからぬようにせねばならぬ。いわゆる「根締めはかたくすべし」とはこれを指すのである。（七八頁）

○いけばなの基本である。何本枝や花を入れたとしても、すべて一ヶ所から出ているようにいけるのが良いとされている。古流・池坊においては一直線に脚を見せている。

②-三.

【本文】或亭亭玉立，或飞舞横斜。花取参差，间以花蕊，以免飞钯耍盘之病。叶取不乱，取不强，用针宜藏，针长宁断之，毋令针针露梗，所谓『瓶口宜请』也。（二五頁）

【和訳】あるいはすらりとけだかく立ち、あるいは飛び舞い、あるいは横斜めに突き出る。花は一様ならぬがよく、これに花蕊をまじえて、あまりにも奇を衒った俗っぽさに陥らないようにする。葉は乱れないのがよく、枝はあまり強くないのがよい。茎を立

てるのに用いる針は隠れて見えないようにすべきで、針の長いのはむしろ切って露わにせぬがよい。いわゆる「瓶の口は清かるべし」とはこのことである。（七八頁）

○今風にいうとフラワーアレンジメントのようないけ方、すなわちシンメントリー（対象）を忌むものである。日本のいけばなでは不等辺三角形を意識して花材の配置を決めるが、中国においても当然同じであろう。「瓶の口は清かるべし」は現代では「剣山隠し」という技法で、花をいける際の技術的工作を見せない努力のことである。花瓶では「葉ずれ」をしないとか、水盤では小石で剣山を隠すとかの技法である。

②－四.

【本文】视桌之大小，一桌三瓶至七瓶而止，多则眉目不分，即同市井之菊屏矣。几之高低，自三四寸至二尺五六寸而止，必须参差高下，互相照应，以气势联络为上。（二二五頁）

【和訳】花瓶は卓子の大小によって三個からせいぜい七個ぐらいまでで、それより多いと、ごたごたしてけじめがつかなくなり、それこそ市で売っている菊屏と同じになってしまう。台の高さは三、四寸からせいぜい二尺五、六寸どまり、必ず高く低く入れちがいに釣合を保たせ、首尾一貫した連絡のあるのをよいとする。（七八頁）

○花材の丈を合わせる「背くらべ」を忌むということである。「連絡ある」とは、いける際に構想を持つことである。ただ枝葉花をいけるのではなく、そこに作者の意図を表現することにより、自ずと首尾が一貫する。

②－五.

【本文】若中高两低，成排对列，又犯俗所谓『锦灰堆』矣。（二二五頁）

【和訳】もしもまん中に高いものを置き、両方に低いのを据えるとか、後ろを高くして前を低くするとか、あるいはあまり均斉をとって列べると、これまた俗にいう「錦灰堆（ごたごたと飾り立ててあくどいものの形容）」に堕してしまう。（七八頁）

○ここでも「クリスマスツリー」のような形や、「仏壇の花」のような左右対称、あるいは均整の取れ過ぎを忌んでいるのである。

②－六.

【本文】或密或疏，或进或出，全在会心者，得画意乃可。（二二五頁）

【和訳】あるいは密に、あるいは疎に、あるいは入り、あるいは出で、全くその道を会得した者の画意を得た配置こそよろしいのである。（七八～七九頁）

○いけばなは当然絵画の影響を受けながら、題材のみが生き物なのである。従って、枝の配置や花の大きさ、葉の扱いなどはすべて絵画を手本とする。その中で疎密に言及しているが、単調に陥らないためにも疎密は重要な要因である。

③

【本文】若盆碗盘洗，用漂青松香榆皮面和油，先熬以稻灰，收成胶，以铜片按钉向上，将膏火化，粘铜片于盘碗盆洗中。佚冷，将花用铁丝扎把，插于钉上，宜偏斜取势，不可居中，更宜枝 疏叶清，不可拥挤。然后如水，用碗沙少许掩铜片，使观者疑丛花生于碗低方妙。（二二五頁）

【和訳】もし碗または大皿の場合だと、精製した松脂と楡の皮と饂飩粉とを油に混ぜて、まずこれを熱い藁灰で膠状になるまで煮詰め、一方、銅片に釘を上に出るように打ちつけておいて、さきに煮詰めたのを強火にかけて融かし、銅片をその碗または大皿のなかに膠着させる。そしてそれが冷えたところで、花を鉄線でしばって、その釘に挿しこむのである。花は斜めにかたよせて位置を取るべきで、まん中に置いてはいけない。ことに枝はまばらに、葉もなるべく少な目なほうがよく、ぎっしり詰めてはいけない。然る後に水を加え、少量の砂で銅片を掩うと、観る人の目にはどうしてもそれらひと叢の花は碗の底から生えたものとしか見えず、まことにおもしろいものである。（七九～八〇頁）

○これもいけばなの基本であり、まん中の線を作るとそこが中心となり、シンメントリーになりやすい。現代日本では中心となる枝の向きによって本勝手・逆勝手を決定し、添えの花を配置している。

④－一.

【本文】若以木本花果插瓶，剪裁之法（不能色色自觅，倩人攀折者每不合意），必先执在手中，横斜以观其势，反侧以取其态，相定之后，剪去杂枝，以疏瘦古怪为佳。（二二五頁）

【和訳】もし木本の花果を瓶に挿す場合の剪裁の方法

は（これはいちいち自分で捜してくるわけに行かず、人に頼んで折り取ってきたのは大抵気に入らぬ場合が多いから）、必ずまず手にとって、前後左右からその枝ぶりを眺め、最もいい形が決定したところで、不要の枝を剪り去り、疎らに痩せて古色を帯びた風変わりなのをよいとする。（八〇頁）

○疎密・痩肥は対立する概念であり、沈復が好むものは疎かつ痩であるもの、それに加えて「古色を帯びた風変わりなもの」を要求している。古色とはただ単に昔風というだけでなく典故をも踏まえた古色であろう。文人いけの場合は花に詩の神髄を注入し、いにしえを回顧するという要素も必要である。「風変わり」とは非凡であること。例え平凡な花材であっても、取り合わせやいけ方によって非凡を演出することは可能である。花材自体が非凡であれば最も良いだろう。

④－二

【本文】再思其梗如何入瓶，或折或曲，插入瓶口，方免背叶側花之患。若一枝到手，先拘定其梗之直者插瓶中，勢必枝乱梗强，花側叶背，既难取态，更无韵致矣。（二五頁）

【和訳】次にその幹をどんな工合にして花瓶に入れるか、瓶に挿すには折ったほうがよいか、それとも曲げたほうがよいかと考える。これは葉が裏返しになったり、花がそっぽ向いたりしてはまずいからである。もし一本の枝を手にして、まずその幹のまっすぐなのを選んで瓶に挿したならば、いきおい枝は必ずごちゃごちゃになり、幹はつんと突っぱり、花はそっぽを向き、葉は裏返しになって、もはや枝ぶりも何もあったものではなくなり、いっそう雅致を失ってしまうであろう。（八〇頁）

○いわゆる「枝を作る」ことである。自然の枝では作者の意図を十分に表現できるとは限らないので、折ったり曲げたりして理想の枝を作るのである。木の性質によって折れにくいとか曲がりにくいものがあるが、それらを踏まえて形成する。

⑤

【本文】打梗打曲之法，锯其梗之半而嵌以砖石，则直者曲矣。如患梗倒，敲一二钉以管之。即枫叶竹枝，乱草荆棘，均堪入选。或绿竹一竿配以枸杞数粒，几茎细草伴以荆棘两枝，苟位置得宜，另有世外之趣。（二六頁）

【和訳】幹を折り曲げる法は、その幹を半分ばかり鋸

で切って、煉瓦のかけらか小石をその間に嵌めておけば、まっすぐなものでも曲がる。もし幹がびよびよして倒れそうな心配があれば、針を一、二本打ちこんで強化すれば、楓の葉や笹の小枝や、荊棘などのような雑草でも、捨てがたい風情になるものである。一本の青竹に枸杞数粒を配するとか、幾本かのささやかな草に荊棘を二本添えても、その配置さえ宜しきを得れば、そこに世俗を離れた趣が生ずるのである。（八〇頁）

○現代日本のいけばなでも広く行われている方法である。煉瓦のかけらや小石は枝の色と似ており、保護色の役割を果たしている。また、ありふれた花材であっても、枝ぶりや取り合わせによって非凡さを演出することが可能であることを言っている。

⑥

【本文】余闲居，案头瓶花不绝。芸曰：〝子之插花能备风晴雨露，可谓精妙入神。而画中有草虫一法，盍仿而效之。〟余曰：〝虫踯躅不受制，焉能仿效？〟芸曰：〝有一法，恐作佣罪过耳。〟余曰：〝试言之。〟曰：〝虫死色不变，觅螳螂、蝉、蝶之属，以针刺死，用细丝扣虫项系花草间，整其足，或抱梗，或踏叶，宛然如生，不亦善乎？〟（二九頁）

【和訳】私の閑居には、机上の花瓶に花を絶やしたことがなかった。芸がいった。「あなたの挿花は風晴雨露のあらゆる風情を備え、まことに精妙神に入ると申すべきです。しかし絵画には草虫を添える一法がございます、どうしてあれに倣ってなさいませんか」「だって虫はこっちの注文どおりじっとしてやしない。真似ようたってできはしないではないか」「わたくし名案があるんですけれど。でも俑を作る罪過が恐ろしいわ」…「虫は死んでもその色は変わりません。螳螂とか蝉とか蝶といった虫をとってきて、針で刺し殺し、細い糸でその首をしばって花や草の間に繋ぎ、その足をそろえて茎にとまり葉を踏まえたりたりした格好にすれば、まるで生きているのとそっくりで、きっと面白いに違いないとぞんじますわ」（八八頁）

○花材を豪華にする必要がなく、「世俗を離れた趣」を旨とするという意味である。ただし、配置に工夫がないと貧相にしか見えず、「雅趣」を追求しなければならない。現代日本の茶席に配する「茶花」にその精神が見える。すなわち、茶道では「一期一会」を大切にしているため、茶花にも「時のもの」を摘んで配する。あらかじめ用意された豪華な花材

ではなく、その時に得たものの取り合わせにより季節を表現するのである。ここではさらに絵画に倣って虫を花に止まらせる、という提案である。ここが中国的な発想と言えよう。日本のいけばなには「魚道いけ」があり、水盤上で魚が泳いでいるのか、と思えるほどの隙間を作る。実際に魚はいないのだが、見る者に「いそうだ」と感じてもらう見立てである。日中の感覚の相異が窺える。

以上六ヶ所にわたって花論が展開されている。そのうち下線（　）を付した部分②－三と③では剣山らしきものの使用が語られ、波線（〜〜）部分は昆虫を茎にとまらせるという絵画的発想のアイディアが披露されている。作者沈復はこの案を聞き非常に驚きかつ喜んだ。今は亡き愛妻の発想力を称えると同時に、彼女を懐かしく思い出している箇所である。

五、『浮生六記』花論の特徴「文人いけ」

『浮生六記』の作者沈復は『紅楼夢』が刊行された時は三一歳くらいだったと推測されている。しかも、彼の親友は『紅楼夢』をテーマに戯曲をものしている(注16)。ほぼ同世代の袁枚（一七一六：康熙五五年〜一七九七：嘉慶二年）は『紅楼夢』の舞台は現在のわが随園で、曹霑（『紅楼夢』の作者といわれている）の先祖の旧宅だと発言し、その女弟子は詩に『紅楼夢』を詠んでいる(注17)。それにもかかわらず『浮生六記』に『紅楼夢』のことが触れられていないのは、巷間言われるように意図して無視しているのではないかと想像できる。

おそらく花をいけるのが達者な作者から見て、『紅楼夢』の挿花に関する記述は平凡極まりないと映ったのではないか。沈復の方が花に対する見識が高く、愛妻の発想力に助けられて「虫を止まらせた作品」まで作ることができた。

また、『瓶史』にせよ『紅楼夢』の紅梅にせよ、中国の花は花瓶にいけるものが一般的であるが、『浮生六記』には剣山らしきものの作り方といけ方が見える。剣山の使用により、彼の目指す作品「文人いけ」が作られたのであろう。

このように見ると『浮生六記』に見える一連の記述は優れた花論であると同時に、文人いけの格言であるとすら言える。

それでは、文人いけの特徴はどのようなものがあるだろうか。

例として、台湾作品と日本作品の文人いけを考察する。

台湾　文人いけの例
『中国传统插花艺术』表紙に挙げられた作品

この作品は、ツルで編んだ籠にいけられている。まず、器が「真行草」の草である。次に、主となる枝が湾曲している。同時に、構図の下の方に黄色の蘭をこじんまりといけて空間を取り、左上に見える文字を見せている。

日本　文人いけの例
「書と花の出会い展」において出品した筆者の作品

これは水盤を使っているが水を見せているだけで、左のしだれ梅は花瓶に入っている。右に低くいけてあるのは芍薬と薔薇で、軸の文言「夕焼け」を表現している。左右共に頭を重くしてあり、定型の逆いけである。定型では上を山、下を野に例え、咲いた花を下にして蕾を上にいけるのが常識である。

次に日本の代表的流派による挿花（写真）を見ると、古流・宏道流においてはほとんど同一と言って良いほどの類似性を持っている。これは、書院造が広まり床の間が出現してから造形されたものである。すなわち、日本古流にみえるように、床の間には基本的に軸を飾る。その軸の飾りとしていけばながあるので、軸部分を避けて枝を配置するため、自然と似たような形になる。むろん、枝ぶりによって逆勝手の場合もある。（写真はすべて本勝手）

日本で最も古いと言われる池坊は、元々仏を荘厳するための花であり軸とは無縁なことから、基本はあるが意外にフレキシブルで「自由いけ」というジャンルすら存在する。

しかし、どの流派においても主な枝、添えの花、のように基本が決まっており、とりわけ日本は四季折々の行事が多いために花材の制限もあった。

以上のような定型とは無縁の、芸術性を追求したいけ方が「文人いけ」であると言えよう。ただ、単に自由勝手にいけるのではなく、見る者に「こころよさ」「雅趣」を与えることを旨とする。

このように、いける場、入手した花材、構図などを定型から逸脱して造形するのが文人いけの特徴であり、『浮生六記』にみえる花論と符合する。

日本古流

古流

池坊

宏道流

六、挿花以外の花

①水仙に関して

おそらく『紅楼夢』を読んだ沈復がそれを意識してか、両作品に水仙鉢の描写がある。

『紅楼夢』では水仙鉢の描写に袁宏道『瓶史』を意識した箇所がみえる。

【本文】有一玉石条盆、里面攢三聚五栽着一盆単瓣水仙、点着宣石、便极口赞：〝好花！〟…〝这是你家的大总管赖大婶子送薛二姑娘的、两盆腊梅、两盆水仙。他送了我一盆水仙…〟

（第五二回上冊　七〇六～七〇七頁）

【和訳】なかに玉石で作った横長の鉢が置かれ、なかには鉢いっぱいに三本四本と束ねた単瓣の水仙が活けてあり、ところどころ宣石（玉の一種）があしらってあるのに眼が留まりました。すかさず結構なお花だとしきりにほめたたえ…「これはじつはおうちの執事頭頼大さんの内儀さんが宝琴さんにさし上げた品でして、臘梅が二鉢、水仙が二鉢ございました…」

（中冊一七一頁）

ここで臘梅と水仙が登場するが、『瓶史』では両者を次のように言っている。

【本文】蜡梅以水仙为婢(注18)。『瓶史』九「使令」

【和訳】蠟梅は水仙を召使いとする。(「花の召使」)(注19)

「花の召使い」とは、「花に召使いがあるのは、ちょうど中宮(ちゅうきゅう)(皇后の宮殿)に宮女がいるようなもの、閨房(ねや)に妾腰(こしもと)がいるようなものである。…そば近くにはべらし、お気に入りとしないものは少ないのではなかろうか(注20)」とのことである。このシーンは蠟梅と水仙が描写されており、袁宏道『瓶史』を意識して構成されていると考えられる。さらに水仙をもらった林黛玉は元々天上界の仙草(絳珠草)であり、「仙」の文字が入っている花をもらって所有していること、水仙は漢語訳であって元は奈只(ないち)といい(注21)、ナルキッソス(ラテン語で水仙)「自己愛」が伏せられている。林黛玉と水仙の取り合わせは単に情景としてだけではなく、彼女の前世が仙草であったこと、他人への愛情が希薄であることのメタファーとして造形されたのではないだろうか。それに『瓶史』を下敷きにして創話したものと考えられる。

『浮生六記』の水仙鉢

【本文】种水仙无灵壁石，余尝以炭之有石意者代之。黄芽菜心其白如玉，取大小五七枝，用沙土植长方盘内，以炭代石，黑白分明，颇有意思。(二六頁)

【和訳】水仙をつくったとき、霊壁山の石がなかったので、石に酷似した石炭でこれに代えたことがあった。山東白菜の芯は白きこと玉のごとく、これをとりまぜて五、六本取り、砂利をいけた長方形の鉢に植え、石の代わりに石炭を配してみると、白と黒とがくっきり対照をなしてすこぶる趣のふかいものであった。(八二頁)

『紅楼夢』には水仙鉢に宣石が添えられていたが、『浮生六記』では石炭と白菜の芯である。貴族の水仙は玉(ぎょく)レベルの石を用いるが、沈復のような寒門文人は安いもの、場合によってはタダ同然のものを用いて「雅」を表現した。ここも沈復が『紅楼夢』を意識しつつ自己賛美している箇所といえよう。

②茉莉花に関して

茉莉花については、花そのものよりも薬品・髪飾りと

して現われている。

『紅楼夢』では第六〇回「薔薇硝事件」で「安っぽい白粉の原料」として茉莉花が語られている。

【本文】〝你常说，薔薇硝擦癣，比外头的银硝强。〟〝…这不是硝，这是茉莉粉。〟 贾环看了一看，果然比先的带些红色，闻闻也是喷香，因笑道：〝这也是好的，…〟 （八二〇頁）

【和訳】「あんたいつもいっていたろう、薔薇硝は癬（くさ）につけるとよく効くとね。」「…これが硝とは真赤ないつわり、茉莉の粉ですよ、これは。」そういわれて賈環、よく見てみましたが、なるほどまえのときのとくらべて少々赤味がかかってはいるものの、嗅いでみると、いいにおいがぷんと鼻を撲つ。そこでにっこりして、「これならいける。…」

（中冊　三〇〇～三〇一頁）

このあと、賈環の母である趙氏が安物の茉莉花粉をつかまされたと芳官（子供一座の一人）へねじこみに行き、大乱闘になった。つまり、『紅楼夢』では茉莉花粉は香りはいいが、安っぽい代物というレッテルが貼られている。

それに対して『浮生六記』においては次のような会話によって茉莉花が評価されている。

【本文】觉其鬓边茉莉浓香扑鼻，因拍其背，以他词解之曰：〝想古人以茉莉形色如珠，故供助妆压鬓，不知此花必沾油头粉面之气，其香更可爱，所供佛手当三舍矣。〟芸乃止笑曰：〝…茉莉是香中小人，…〟余曰：〝卿何远君子而近小人。〟芸曰：〝我笑君子爱小人耳。〟 （九頁）

【和訳】その鬢にかざした茉莉花のつよい香りがつうんと鼻にきたので、彼女の背中を叩きながら話の筋をかえ「僕ったら、茉莉の形や色が似ているところから、古人が装いを助けるものとして鬢に挿すようになったのだとばかり思っていたら、どうだ、この花が髪の油や白粉の気に染むと、その香りも存外愛すべきものがあるんだね。これじゃお供えの仏手柑なんか、恐れ入って逃げだすだろうな」というと、芸はようやく笑いを納めて、「…茉莉花などは、まあ香中の小人といったところですわ。…」「そんなら君はなぜ君子を遠ざけて小人を近づけるのさ」「わたくしは君子を笑って小人を愛しているだけなんですわ」 （三八～三九頁）

『浮生六記』では茉莉花の評価が比較的高いことが分かる。沈復が「存外愛すべきものがある」と感想を言うと、芸は「香中の小人」といいつつも、「私は茉莉花が好き」と認めている。さらに、仏手柑が引き合いに出されているが、これも『紅楼夢』第三九回・第四〇回で登場するアイテムであり、ここでも『紅楼夢』を意識した表現がみられる。

③蓮に関して

『紅楼夢』における蓮は「芙蓉」という形で登場する。芙蓉は主人公賈宝玉にとって忘れることのできない亡き女中の晴雯が司る花である。林黛玉の投影とされる晴雯は死んで芙蓉の仙女となった。賈宝玉はそう信じて「芙蓉女児誄」を創作して供えた（第七八回）。

しかし、『浮生六記』において蓮はお茶の香り付け、として登場している。

【本文】夏月荷花初开时，晚含而晓放。芸用小纱囊撮茶叶少许，置花心，明早取出，烹天泉水泡之，香韵尤绝。（三三三頁）

【和訳】蓮の花は夏咲き初めのうちは、晩にしぼんで明け方にひらく。芸は小さな絹の袋に少量の茶の葉をつまんで、花芯の中に入れておいた。翌朝それを取り出して、天然の泉の水の熱湯をそそぐと、えもいわれぬ香りがするのであった。（九八頁）

このシーンが独創か否かは判断できないが、かつてベトナムでは蓮の花の中に茶葉を入れ、花が閉じている夜の間に花の香を移し、花が開く朝に茶葉をとってお茶をいれたといわれている(注22)。『浮生六記』の作者は幕友として様々な土地へ赴き、変わった事象にも親しく触れたであろう。越南（ベトナム）の風習を踏襲していたのかもしれない。また、袁枚も茶葉を蓮の花に入れた(注23)らしいので、こちらの引用かもしれない。いずれにせよ、『紅楼夢』にもお茶はしばしば登場するが、蓮の花に茶葉を入れるという箇所は見当たらない。

④盆景作りにおける花

筆者はいけばなについての知識は多いが、盆景の花については門外漢である。が、以下の『浮生六記』巻二にみえる描写は恐らく非常に珍しいものだと思われるので、挙げる。

【本文】以此类推，幽趣无穷，难以枚举。如石菖蒲结

子，用冷米汤同嚼，喷炭上，置阴湿地，能长细菖蒲，随意移养盆碗中，茸茸可爱。以老莲子磨薄两头，入蛋壳，使鸡翼之，俟雏成取出；用久年燕巢呢加天门冬十分之而，捣烂拌匀，植于小器中，灌以河水，晒以朝阳，花发大如酒杯，叶缩如碗口，亭亭可爱。

（二七頁）

【和訳】これらを推して行けば、幽けき趣味を得る道は無限にあるのであって、いちいち挙げられない。たとえば石菖蒲の種子を、冷えた重湯といっしょに嚼（か）んで、木炭の上に噴きつけ、暗い湿ったところに置いておけば、細長い菖蒲が芽生える。これは鉢なり碗なりに自由に移し植えることができ、そのぼうぼうと生い繁ったところは、なかなか愛すべきものがある。または古い蓮の実の両端を軽く磨って、卵の殻に入れて雞に暖めさせ、雛が孵ったところでこれを取り出す。一方、年久しく棲みふるした燕の巣から取った泥と天門冬（くさすぎかずら）十分の二を加え、くたくたに搗いて十分にかき拌ぜたのを小さな器に入れ、さきの蓮の実をこれに活けて、河水を灌け、朝日に晒しておけば、やがて酒杯ぐらいのちんまりした花がひらく。葉も茶碗ぐらいの大きさに縮まって、すらりと立った風情は甚だ可愛らしいものである。（八二～八三頁）

このくだりが沈復の独創なのか、受け売りなのかはさておき、マニアック振りが『紅楼夢』第四一回に出てくる「茄鯗（茄子のひもの）」（注24）を彷彿する。あるいは、これに対抗しようとして沈復が知識を開陳したものか。

おわりに

以上、花をキーワードに『紅楼夢』と『浮生六記』とを比較した。

挿花においては、『浮生六記』の独壇場であった。単に花をいける描写だけではなく、もはや「花論」と呼べるほどの持論を展開していた。とりわけ、中国では発明されなかったと考えられていた剣山を、沈復が考案発明したことは特筆に値する。

鉢花に関して、たまたま水仙が両作品に登場することから比較を試みたが、『紅楼夢』では貴族階級らしく高価な玉（ぎょく）をあしらっているのに対し、『浮生六記』の場合は「いかにお金を掛けずに雅な生活を送るか」がコンセプトになっているので、炭と白菜を宝石に見立てて鑑賞する、となっていた。さらに、盆景作りに関してはほとんど「専門書」の域に達していた。

結局、『紅楼夢』における花とは「散りゆく花」＝「別れゆく女性たち」を象徴しており(注25)、『浮生六記』における花は自分と愛妻とが鑑賞して楽しむ花、創造していく花といえよう。ここに両者の大きな相異が存在し、『紅楼夢』を読んだと思しき沈復は、自らの花論を述べること、それが『紅楼夢』世界の花とは異なっており、ハイレベルであることを伝えたかったのではないだろうか。

もちろん、沈復の花論に則った文人いけは書斎にあって清と雅とをもたらしたであろうし、客人たちもそれを心から観賞したことだろう。

この『浮生六記』の花論を現代のいけばなに応用することが、華人社会の今後の課題ではないだろうか。

注

(1) 張慧劍『明清江蘇文人年表』(上海古籍出版社、一九八六年)一三三六頁には「琉球觀海圖」を作ったとある。なお、中国が主張した「浮生六記に魚釣島の記述があるので、魚釣島は中国領である」という主張は、単なる発見であり占有の証拠となり得なかったため、すぐに下火となった。

(2)「もしそれ園亭、楼閣、套室、回廊、築山の石の配置、花果の栽培となれば、…地域が広く、庭石が多くていたずらに工事に金をかけたというだけが能でもない。」(松枝茂夫訳、八三頁)には、『紅楼夢』の大観園を批判している。

(3)「私がこの本にめぐり逢ったのは大学二年の時であった。…私はその前から『紅楼夢』に熱中していて、何を見ても、何を読んでも、『紅楼夢』と関係づけてしか考えない癖がついていた。そういう私にとって、これはまさしく小型の『紅楼夢』のように思えて仕方がなかった。」(岩波「解説」、二六九頁)

(4)石田貞一について。一九六二年刊の創元推理文庫で、『チョールフォント荘の恐怖』という本を訳している。その「訳者紹介」に、「一八九四年大阪に生まる。日本電報通信社上海支局英文主任、同盟通信社に勤務、現在洋書店を経営。現住所、東京都豊島区椎名町6の2270。主な訳書、沈復『浮生六記』」と見える。(日中文学文化研究学会 紅楼夢研究会所属水野力氏調べ)その訳本には沈復画が付されている。

(5) 佐藤武敏『中国の花譜』(平凡社、一九九七年、一三頁)

(6) 佐藤武敏前掲書一〇頁

(7) 袁宏道(一五六八：隆慶二年～一六一〇：万暦三八年)字、中郎／号、石公。公安(湖北省公安県)の人。『瓶史』邦訳は前掲『中国の花譜』二一六～二四〇頁。

(8)『瓶史』のタイトルを挙げる：

一　花目(花の品評)

二　品第（花の品定め）
三　器具（花を生ける器）
四　択水（水をえらぶ方法）
五　宜称（釣合い）
六　屏俗（通俗をしりぞける）
七　花祟（花のたたり）
八　洗沐（沐浴）
九　使令（花の召使い）
十　好事（物ずき）
十一　清賞（清らかに花をめでる）
十二　監戒（いましめ）

（9）日本の剣山は明治期に盛花（主として小原流）が流行した際の発明とされる。笹岡隆甫『いけばな　知性で愛でる日本の美』（新潮社、二〇一一年、一四七頁）

（10）马大勇『中国传统插花艺术』（中国林业出版社、二〇〇三年、二六一頁）

（11）民国時代に活躍した作家の周瘦鵑（一八九五～一九六八）には『插花』『再谈插花』『夏天的瓶供』などの作品があるが、いわゆる花論までの水準には達していない。

（12）『实用插花基础教程』（浙江科学技术出版社、二〇一二年）

（13）『花道之美』（中華人文花道發展協會、二〇一一年）には、小原流、古流、池坊、松風花道会、草月流の作品が収められている。

（14）『いけばな便利帳』（主婦の友、一九九八年、一二六～一二九頁）

（15）定型化したいけばなではなく、形式にとらわれない自由ないけばなのこと。前掲『いけばな便利帳』二五八頁

（16）『紅楼夢傳奇』を創作した石韞玉（一七五六：乾隆二一年～一八三七：道光一七年）字、琢堂は沈復の幼なじみであった。松枝茂「解説」二六九頁

（17）金逸「寒夜待竹士不帰読『紅楼夢』伝奇有作」：『袁枚　一八世紀中国の詩人』アーサー・ウェイリー（平凡社東洋文庫、一九九九年、三四二頁）

（18）袁宏道『袁中郎筆記』（作家出版社、一九九五年、二五五頁）

（19）佐藤武敏前掲書　二三三頁

（20）佐藤武敏前掲書　二三二頁

（21）中村公一『中国の花ことば―中国人と花のシンボリズム―』（岩崎美術社、一九八八年、一八五頁）

（22）『アジアのお茶を楽しむ』（新星出版社、二〇〇二年、一四頁）

（23）中山時子訳『随園食単』（柴田書店、一九七五年、二一九頁）

（24）茄子の皮を剥いて中の果肉だけにし、細切りしてから鶏の油で揚げ、色々な具とともに鶏のスープで汁がなくなるまでとろ火で煮、ゴマ油を吸わせて糟油を加えてかき混ぜ、磁器の壺に入れて封をする。食べる時に取り出し、炒めた鶏の足

と混ぜ合わせる。別説に、茄子の皮とわたを取り除き、細切りにしてから日向で乾す。鶏スープで茄子を蒸し、また乾す。この手順で九回蒸し乾しし、磁器に貯える。食べるときに炒めた鶏肉と和える。

(25)『紅楼夢』にも様々な花が登場するが、最も有名なのは「黛玉葬花」(第二三回)という情節である。

【附記】本稿は、国際文化表現学会第九回大会(日本大学国際関係学部二〇一三年五月一一日)において口頭発表したものに加筆修正した。